

こぞみ 小沢見海岸コース



小沢見海岸は、岬と岬の間にはさまれた砂浜海岸で、夏は海水浴場としてにぎわう美しい海岸です。その西側にある牛込海岸もプライベートビーチのような海岸で人気があります。これらの海岸の背後には小さな砂丘が形成されており、砂丘の南側の湿地は水田として利用されています。

美しい自然を守るため、砂や動植物は観察するだけにしましょう。
危険な場所や立ち入り禁止の場所には入らないようにしてください。
持って帰るのは楽しい思い出と写真、そして地元のおみやげ!!



みどころいっぱい小沢見海岸

①道の駅神話の里白つなぎ



目の前には神話「因幡の白兔」で有名な白兔海岸が広がります。2階からは直接歩道橋を渡り、白兔海岸へ行くことができます。サーファーや海水浴客、白兔神社の参拝客などで賑わっています。
(問)0857-59-6700／8～22時(12/3～2/28は8時30分～22時)／年中無休

②小沢見海岸



小沢見海岸の砂は粒の大きさがよくそろい、波に洗われた無色透明な石英の粒がきらきらと輝いて見えます。乾いた砂浜を歩くと、キュッキュッと高音の澄んだ音を発します。浜の中央には小さな流れの小沢見川の河口があり、砂鉄を含んださざ波模様が見られます。(※ジオコラム①参照)

③赤島



小沢見海岸の西端の岬の先にある岩礁は赤島と呼ばれています。赤島では大小の角ばった岩石を含んだゴツゴツした地層の上を、約1800万年前の日本海が拡大したころの安山岩の溶岩が覆っているのが観察できます。本来は黒ずんだ色をしています、酸化によって赤色になっている部分があります。これと同じ溶岩は白兔海岸の西から水尻海岸の東にかけて岬を作っています。

④北野神社



小沢見海岸の西の岬の上にある神社です。学問の神様の菅原道真公をまつり、古くから天神または天満宮と称され、明治初年に北野神社と改称されました。小沢見地区の氏神で、4月の例祭には、以前は神輿や榊が各戸を練り歩きました。

⑤安山岩の岩脈



小沢見海岸の西側の岬は、約1800万年前の安山岩の溶岩でできています。この岬を幅20mくらいの安山岩の岩脈が東西に貫いているのが、岬の西側と東側から見るすることができます。(※ジオコラム②参照)

⑥砂丘の断面



牛込海岸では、小沢見砂丘の断面を見ることができます。細かい砂が地層を作っています。よく見ると、下の水平な地層を、上の傾いた地層が切っており、上の層は砂丘の斜面にほぼ平行です。これは、かつての砂丘が風で削られて、その後、飛んできた砂がたまり、現在の砂丘ができたことを示します。このように砂丘は侵食と堆積を繰り返しながら成長したことが分かります。

⑦砂丘の後背湿地



小沢見の集落の南側は湿地帯が広がり、現在は水田として利用されています。稲を刈った後の冬期には、小沢見川の潮止堰が閉じられるため、かん水して、池のような状態になります。ここにはカモ類やサギ類などの水鳥が飛来します。(ジオコラム③参照)

おすすめ…白兔礫層露頭



ここで見られる地層には、円い大きな石(礫)が数多く含まれています。このような地層を礫層と呼びます。火山の噴出物が水の流れによって運ばれて火山の裾野の扇状地にたまったものと考えられています。

おすすめ…気多ノ前展望広場(白兔の丘)



小沢見海岸の東端の気多岬の上にある展望広場からは、小沢見海岸や白兔海岸はもちろん、鳥取砂丘の海岸線、背後の山々を眺めることができます。

おすすめ…水尻池



小沢見海岸の西隣の水尻海岸の南に水尻池があります。水尻池は、水尻海岸の砂丘が発達して内湾が海と隔てられてできた潟湖として誕生しました。大正時代に水田を作るために干拓が行われましたが、現在では元の池にもどされています。カモ類をはじめとする様々な渡り鳥の越冬地となっています。

ジオコラム①

黒い砂はなんだろう？

小沢見海岸の中央部に沢が海に注ぐ場所があります。その川底に黒い砂がたくさん溜まっています。この黒い砂は「砂鉄」です。小沢見海岸の砂を掘ってみると、黒い砂鉄と白い砂が交互に層になっているのが分かります。砂鉄は岩石中に含まれる磁鉄鉱という鉄を主成分とする鉱物が風化によって分離したものです。

山陰海岸ジオパークエリアの河川や海岸の砂には砂鉄がたくさん含まれ、古代には「たたら製鉄」の原料として用いられました。戦時中には、小沢見海岸でも砂鉄が採掘されていました。



クイズの答え

文久2年(1862年)
※石灯籠の側面に記されています。幕末の石工「川六」が鳥取市青谷で採石される「青谷石」(玄武岩)を使って制作したものです。

ジオコラム②

マグマの通り道「岩脈」

マグマは地下の割れ目を通して地上に噴出します。地上へ噴出することのなかったマグマが地下の割れ目の中で冷えて固まったものを「岩脈」といいます。牛込海岸の岩脈を近くで見えてみましょう。岩脈の縁から垂直に割れ目が発達しています(写真の破線)。

これはマグマが冷えて固まるときに収縮してできる割れ目です。立体的にみると、下の図のように五角柱や六角柱状になっていて「柱状節理」と呼ばれます。この岩脈は岬を東西に貫き、小沢見海岸の西端にも露出しています。また、岬の尾根のちょうど岩脈の上に北野神社があります。



岩脈の模式図



牛込海岸の岩脈

ジオコラム③

後背湿地での農業

小沢見の集落の南側の低地は、砂丘の発達によって内湾が外海と隔てられてできた潟湖が干上がったものです。山から来る水が砂丘にせき止められるため、湿地となっており、農業に不向きな土地でした。そこで昭和の初め頃、小沢見砂丘の砂を使って湿地を埋め立てることによって、稲作ができるように土地が改良されました。耕作地は標高が非常に低い土地のため、高潮や満潮時に海水が小沢見川を逆流して農地に侵入する危険があります。そのため、小沢見川の河口に潮止の堰が設置されています。稲の収穫が終わり、日本海が荒れる冬期には潮止堰が常に閉じられているので、水が排出されず、農地が池のようになります。



小沢見の夏の姿



小沢見の冬の姿

制作:鳥取県、鳥取市、鳥取大学地域学部(平成27年度鳥取大学地域貢献事業)
山陰海岸ジオパーク推進協議会